

提出締切：2010年5月20日（木）

2009年度採択 研究推進プログラム「科研費連動型」 研究成果報告書

研究代表者	所属機関・職名： 氏名：	情報理工学部 教授 仲谷 善雄
研究課題	偶発性を促進する観光ナビゲーションの研究	

・研究計画の概要

研究の計画について、平成21年度科学研究費補助金申請時の計画概要を記入ください。

観光立国を目指す国の政策を受けて、観光地における徒歩による移動を支援する観光ナビについて新たな提案を行う。従来の観光ナビは、カーナビの延長上で、目的地までの最適ルートを提案するものであるが、これでは目的地に到着することだけが目指され、観光本来の目的である、その人だけの、新たな体験を得るといった目的が必ずしも実現されない。実際の観光では、たとえ目的地に到着できなくとも、移動のプロセスが印象深ければ、よい旅であったと評価されるのである。我々のアプローチは、必ずしも目的地に到着することだけを目的とせず、周囲との相互作用を誘発するような機能を提供するものである。そのために、道は目の前にあるのだから、道に関する詳細情報はあえて提供せず、ランドマークなどの補助情報を中心に提供することを考える。認知科学の知見からも、移動のためには、道路情報は必ずしも重要ではなく、途中の目印となる特徴的な建物や存在（ランドマーク）が重要であることが指摘されている。今年度は、これまで実施してきた手法（観光前に電子地図上で訪問希望先にアイコンを置き、ルートをアイコン間をフリーハンドで結んで描画させ、観光時には背後の電子地図を隠してアイコン、フリーハンドのルート、およびGPSデータのみ提供する方法、および電子地図は見せるが現在位置の周辺の地図を隠す方法）の理論的根拠（なぜ周囲との相互作用を誘発できるのか）を詰めると同時に、航空写真と現場写真の組み合わせでオリエンテーリングのようにルートを探す方法について、システム化して効果を検証する。

・研究成果の概要

研究成果について、概要を記入ください。

研究成果として、カイヨワが指摘する遊びの要素の中の「眩惑」を中心概念として本手法が与える「面白さ」のモデル化を試みた。航空写真と現場写真の組み合わせによる方法について、システム化し、実証実験により、観光地に関する新たな発見を誘発するとともに、寄り道行動などの行動を誘発することで思い出を残せることがわかった。

学会発表は、国内学会4件、国際学会2件（うち1件は2010年度発表予定）である。国内のヒューマンインタフェース学会論文誌にも論文投稿した（査読中）。特に、2009年10月にカリフォルニア大学バークレー校で開催されたInternational Conference on Systems Engineering and Engineering Management 2009 (ICSEEM2009)での発表論文は、Best Paper Awardを受賞した。

本ページはホームページに公開いたします。1ページに収めてください。